
死刑囚子育てプロジェクト

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死刑囚子育てプロジェクト

【Nコード】

N3188Z

【作者名】

暁

【あらすじ】

とある刑務所内では、死刑囚を使ったプロジェクトがおこなわれていた。このプロジェクトの先に待つのは、絶望か希望か…。

1話 前編(前書き)

このサイト&ネット連載初挑戦です。誤字脱字ありましたら、ごめんなさい。

1話 前編

10月1日 とある刑務所内会議室

『死刑囚 060号 柿島 要人。生い立ちや過去は一切不明のホームレス。確認できるだけでも31人を殺害』

プロジェクト参加メンバーは、手元の資料を読んでいく。

「梨東、本当にこんな奴に子育てができるのか？」

「彼が育てる柚木リサちゃんには色々と問題がありますしね…」

「まあ、やってみようよ。いつちゃん？」

「桃谷！いつちゃんて言うな！私は苺島だ！」

苺谷は桃屋に掴み掛る。

「060号を連れて来るので、落ち着いて下さい！」

とある刑務所内 特別プロジェクト参加死刑囚収容独房

薄暗くジメジメしている通路を歩き、060号が収容されている独房についた。とても分厚い扉を開け中に入ると、暗闇の中に拘束された060号を見つける。

何もここまで拘束しなくてもいいのでは？と、疑問が頭に浮かぶ。

「……あつ、今拘束を解きますね」

僕は頭に被せられた袋を取り、目隠しと猿轡を解く。

「大丈夫ですか？」

「…医者か？」

「白衣を着ていますが、医者ではありません。犯罪心理学者の梨東

一多喜です。拘束具、全部解いてしまいますね」

060号の足枷と全身の拘束具も外していく。

「外してもいいの？」

「逃げようとしても無駄ですよ。逃げたらあなたの首輪が爆発しますからね」

「それは分かっている。俺に何をするか聞いているんだ？」

「あなたは特別プロジェクトに選ばれたんです」
「プロジェクト？…ああ、死刑囚に薬物投与の人体実験をしたり、
女死刑囚に子供を産ませて、人殺しの子供は人殺しになるか調べた
りする、あの狂ったプロジェクトか」
「あなたがするのはそんな事じゃありません。あなたがするのは、
あなたが殺した人の子供を育てる事です」
「はあ！？」

1話 前編（後書き）

またキャラの名前間違えたので、直しました。

1話 中編(前書き)

前回途中になってすみませんでした。

グロテスクと書きましたが、グロテスクになるのはもう少し後です。
では、続きをどうぞ。

1話 中編

「このプロジェクトはの意味は、殺人鬼でも更生できるかなんです」
「……………」

ガシャンという音と共に、060号拘束具が完全に外れた。体を自由に動かせるようになった060号は、ストレッチしながら考え事をする。

「俺はここから出られないしな。やってやるよ。そのプロジェクト」

「そうですね。まあ、断つても無理矢理参加させるんですけどね…
とにかく、これを飲んでください」

梨東は持っていた鞆の中から水筒を取出し、その中身を白衣のポケットに入っていた、折り畳み式の紙コップに注ぐ。そして、その中身は……………尿にしか見えない物だった。

「これって……………」

「おしっこじゃないです！あなたをより安全に移動させるための睡眠薬です！」

「いや……………それを言うとか飲みにくいんだけど……………」

「あつ……………とにかく！飲んでください！」

「……………」

嫌そうな顔をする060号に、梨東は尿にしか見えない睡眠薬を強気に押し付ける。

「飲めばいいんだろ！」

060号は、なかばヤケクソで睡眠薬を飲み干す。その瞬間、060号は足から崩れ落ちた。

…よし、ちゃんと息はしているな。あの人が作った睡眠薬だから、少し不安だったけど……………とにかく連絡しよう。

梨東は無線機でどこかに連絡する。

「梨東です。060号眠りました。手術室に運びます」

………何かも失ってしまった……。空腹で力が出ない……。もう………何日普通の飯を食っていないだろう……。ゴミ箱の残飯を漁る気力もない……。後は死を待つのみか……。

××が死を覚悟した時、上から食べ物が降ってきた。××はそれを貪りながら食べる。

「かわいそうに……お腹が空いていたんだね」

「お前は……」

上を見上げると、××と同じ年ぐらいの人物が立っていた。

「××君……だよな？」

「何の用だ」

「君にいい物を持って来たんだ」

謎の人物は、持っていた鞆の中から、戸籍謄本こせきとうほんを出した。

「これって……」

「死んじゃった君の新しい戸籍だよ」

「でも」

「買い取ったんだ。ある自殺志願者から。このままこの人が戸籍上死んだ事になったら、もつたいたいじゃん」

「もつたいたい？」

「君は戸籍上死んだ事になっている。でも……もう1度生きたいでしょ？ 別の人になっても」

「……」

何も言い返せない××を満足そうに見つめながら、謎の人物ははなしを続ける。

「君がこの顔に整形して、新しく、××××じゃなく、柿島 要人として生きるんだ。……その代わりに、君に頼みたいことがある……」
ピピピピピピピピピピ。

何か鳴ってる……時計？ 俺は手探りで時計を探し、アラームを止める。
………懐かしい夢を見た。あいつの名前……何て言ったっけ？………ダメ

だ。思い出せない。

『ハーロー！060号くん』

「おわっ！」、

頭の中で声が聞こえる。

『ぼくは桃谷 やなぎ。このプロジェクトの一員さ』

「状況を説明しろ！」

『簡単に言えば、君の脳の中に特殊なチップを埋め込み、目には特殊カメラ付きコンタクトレンズを装着した。チップからは、会話や聞いていることが音声データとして記録され、コンタクトレンズからは、君の今見ているがこちらのモニターに映し出せる。チップは通信機能付き ！』

060号はしばらく考えた後、再び喋りだす。

「つまり、全て監視されているって事か」

『そゆこと？そして、その部屋にいる子供を君が育てて、その結果次第で即死刑か減刑か仮釈放が決まるんだ』

「子供？」

部屋を見渡すと、隅っこにぬいぐるみを抱えている子供が、060号を睨んでいた。

『だから、このプロジェクトは『死刑囚子育てプロジェクト』っていうんだよ。わーかーるーかーなー？』

なんでこいつは楽しそうなんだよ……。こっちの気持ちも考えろっつーの。

1話 中編（後書き）

壊れた携帯の未送信メール保存機能を使って、小説の下書きを書いているのですが、携帯の電源が切れたので、今回はここまでになります。

すみません！次でちゃんと1話を終わらせるので、次まで少しお待ちください！

そして、現在、小説タイトルと小説に出てくるキャラ名を募集しています。詳しくは活動報告で確認してください。

1話 後編(前書き)

ここに何書いたか思い出せない…。
訳が解らない人は、活動報告へ。

1話 後編

…ん？何かへんだ。

頭の違和感に気付いた060号は、部屋に設置してある鏡を見る。

「……髪が短い」

「ボサボサの髪がウザかったから、君が寝ている隙に切ったんだ。手術の時剃ったから、後ろちょっとハゲているけど。嫌だった？」

「…まあいい。他に何のしなかつたんだろうな？」

「君、臭かったから寝ている隙に勝手に風呂入れたんだけど、その時チ××触った」

「お前どこ触ってたんだ！」

060号の大声に驚いた柚木は、ベッドの下に隠れてしまう。

「もう、話が先に進まないの、今度は僕が進行します」

「話に入ってこないで」

「警察の方が待ってますよ」

「はあ〜い」

ガタツとイスを引く音が聞こえる。どうやら、桃谷はどこかに行つたみたいだ。

「何か聞きたい事はありますか？桃谷さんの事以外で」

「…子供のデータをくれ」

「待ってください」

パラパラとページを捲る音がする。何かの資料を見ているのだろうか？

「えっと、その子は柚木 リサちゃん、5才。あなたに両親を殺されてから、ずっと施設にいましたが、施設が閉園する事になり、リサちゃんはここに来たんです。今言えるのはこれだけです。あと、リサちゃんという時だけ、本名を使ってもいいですよ」

「ちなみにこつちの声は君にしか聞こえないから、リサちゃんから見れば、君は1人で喋っている変な人〜！」

『ちよつと！勝手に入ってこないでください！』

『じゃ、通信を切るよ〜』

『人の話聞いて』

ブツツ、ツーツー。

…通信ってこんな風にきれるのか。さて、ヒマだし子供と話してみるか。

060号は、ベッドから出てきて部屋の隅で絵本を読んでいる柚木に近づき、隣りに座る。

「……柿島 要人だ。その…よろしくな」

「……」

無視かよ…。仕方ねえ、次は…握手でもしてみるか。

060号は、柚木の目の前に手を差し出す。

「……」

バシッ！

「ぬあ！」

このガキ！俺が出した手を叩きやがった！

「ひっしね。そんなにそとにでたいの？バツカみたい」

柚木は、明らかに060号の事を見下しながら、毒舌を吐く。

「このクソガキー！」

キレイやすい060号のストレスメーターは限界を超え、ブチ切れた060号は、柚木の胸ぐらを掴み上げた。しかし、柚木は顔色1つ変える事なく、冷めた目で060号を見つめる。

『怒っちゃダメです！その子を1回でも殴ると、あなたは即死刑になりますよー！』

「…チッ」

納得のいかない060号は舌打ちをしながらも、渋々柚木を床に下す。

『とにかく、ちゃんと謝ってください』

「……………」

「わかればいいのよ」

柚木は絵本を持って、またベッドの下に潜っていった。

「…出てこいよ」

「あんたのかおみたくないのよ」

「わかった、もう勝手にしろ！」

あーイライラする！……仕方ねえ、俺も部屋にある雑誌でも読むか。

同時刻 監視室。

「リサちゃんは060号の事、何も知らないんですよね？」

「相性が悪いんじゃないの？ボクといっちゃんみたいに」

バンツ！

「も〜も〜た〜に〜」

勢いよく監視室の扉を開け入ってきたのは、明らかに怒っている苺島だった。

「ウワサをすればなんとやら」

「怒ってるじゃないですか。今度は何を、うわっ！」

2人の間を割って入り苺島がテーブルに置いたのは、数本のアダルトビデオだった。

「私のロッカーにこんなふしだらな物を入れたのはお前だろ！」

「だって〜、君のロッカー何にも入ってないんだもん。何か面白い

物入れておきなよ。苺島 かなつ 叶警視總監」

桃谷の言葉に、苺島は顔をしかめる。

「……今はこの刑務所の看守だ」

「そうだったね……」

2人は睨み合う。

「どっちも前途多難ですね」

夜 柚木と060号の部屋。

『リサちゃんと一緒に寝てね〜？』

「はいはい……。おい、寝るぞ。布団の中に入れ」

「……」

柚木は、060号をジッと見る。

「そこ、寒いだろ。ほら」

060号が布団を捲つてしばらくすると、柚木が布団の中に入ってきた。そして、060号のお腹の上に乗る、すぐ眠りだす。

「…なあ、こいつ重いからどかしてもいいか？」

『ダメ 多分、リサちゃんは君に甘えているんだよ』

「おい！こいつヨダレ垂らしているぞ！」

『いいじゃん、ヨダレくらい。我慢しなよ』

「……今日だけだからな」

やがて、060号も眠りについた。

深夜 監視室。

「桃谷さん、これ、飲んでください」

梨東は桃谷にコーヒーを差し出す。

「ありがとう」

桃谷がコーヒーを飲んだのを確認して、梨東は桃谷に隣りに座る。

「初日、なんとか終わりましたね。それにしても… 苺島さん、まだ仕事終わらないのかな？」

「気になるの〜？」

「ち、違いますよ！あつ、きつ、今日のデータ、記録しますね」

「君は本当に解りやすいね」

顔が真っ赤になっている梨東を、桃谷はニヤニヤしながら見つめる。

「そ、そんな事より、何時言っんですか？060号に残された時間が10月31日までって事……」

2話へ続く。

1話 後編（後書き）

060号を坊主にするか悩んだんですが、結局坊主にするのをやめました。そっちのほうが、カッコいいので。

あと、総官の字、間違えていたらすみません。

あっ、苺島の性別は次でわかります。

2話 前編(前書き)

寒い…寒すぎる…。また、途中で止めるかもしれません

2話 前編

10月2日 『死刑囚子育てプロジェクト』2日目。 早朝、柚木と060号の部屋。

「こんな事もうやつてられるかー！」

静かな部屋に、060号の大声が響く。柚木は危険を感知して、ベツドの下に潜り込む。

『おい！何があった！』

突然通信が入ってきた。060号は少し驚きつつ答える。

「お前誰だ？」

『葛島 叶。女だが、私を女扱いしたら打つ潰す！で、何があった？』

「このクソガキが俺の上で漏らしやがったんだよ！」

『子供なんだから、お漏らしぐらい当たり前だろ。夜、トイレに連れて行ったのか？』

「……行ってない」

『じゃ、お前が悪い。そのくらいの子供は、夜寝る前にトイレに連れて行くのが常識だ。後で子育ての本を渡すから、それを見てがんばれ』

…通信が切れた。まったく、どうしろっていうんだ…。

「…んしょ」

060号が静かになったため、柚木がベッドから出てきた。そして、柚木は060号をジッと見つめる。

「…なんだよ」

「……ごめんなさい」

「！…まあ、謝るなら許すよ」

「……」

「うおわ！」

何だこいつ！いきなり俺の膝の上に乗ってきやがった！

「…どうすればいい？」

『とりあえず、頭撫でてみるのはどう？』

何時の間に交代したんだ…？とにかく、俺は桃谷の言う通り、柚木の頭を撫でてみた。

「さわらないで、へんたい」

「！！」

この…クソガキが！

060号は、膝の上の柚木をすごい勢いで投げる。上手い事ベッドの上に着地した柚木は、状況が呑み込めず固まっている。

『あんまり乱暴しやダメだよ』

「あれくらいいいだろ。無傷だし」

コンコン。ドアをノックする音が聞こえる。

ん？誰か来たのか？

「失礼します」

入ってきたのは、梨東だった。

2話 前編（後書き）

すみません。手が限界で凍傷になりそうなので、続きは仮眠を挟んだ2時ごろに書きます。少しお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3188z/>

死刑囚子育てプロジェクト

2011年12月17日09時47分発行